

編集室から

5年毎に集ろう！札幌時代を過ごした高校の同級生の間で、決まりました。その区切りの年の昨年、愛車で新潟からフェリーに乗り込み、北海道へ。抜群の天候に恵まれ、利尻富士を眺めながら、稚内・宗谷岬。かつて我が国の土地で、唯一他国と国境で接していた樺太を、遥かに見ることができました。

周囲を海に囲まれているこの国では、普段国境を意識することはほとんどありません。その中で、北海道の北と東の端では、海峡という形で国境を見せられます。

いかなる理由にせよ、戦争を正当化することには組しません、見えない国境線を感じられる地に立つと、この国が戦に負けた事実と、それによって国土だけでなく、意識も小さく閉じ込められてしまっている気がします。壮絶な犠牲者を出した広島・長崎・沖縄を訪れば、勿論ですが、見えるもの・見えないもの、それらの総てを以って、払った代償の、そのあまりの大きさにしばし途方に暮れるのです。

昨年、初めてあるいは、久々に訪れた道内各地は、とても美しく、新たな思い出の数々となりました。ところが、その地が今年は一転。数度の直撃台風の被害から、惨憺たる状況に陥っている模様です。

昨年は、周遊先として北を極めるか、東を目指すか迷い、北に針路をとりましたが、今回は東と決めていただけに、農地を始めとして広範囲に被災した道東地域が気になっています。

本欄では、地球温暖化に対して再三、触れています。平均気温が上昇するにつれ、台風の最大風速や雨量は激甚化することが予測されています。今後益々大きな被害をもたらす災害の発生頻度が高まっていくとするならば、些細な日常といえども馬鹿にせず、個人レベルで適切な対応を重ねていくしかなさそうです。(は)



Chintara

日本酒バルChintara
03-6427-8183
17:00～24:00
金曜17:00～28:00日曜祝休
渋谷区道玄坂2-19-3
ライオンズマンション道玄坂1階

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。
上京された際、ご利用になっ
てみてください。
もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2016/09
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2016/09
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

長 月



北海道宗谷岬より
樺太南端をかすかに望む
by hama

濱のつぶやき 『脳力』

世の中にはほんとうに色々な職業・研究対象があるものだと思う。

先日、知人の勧めで利き脳を診断するプログラムに参加した。ヒューマンセンサーと称するこのプログラムの実績には、誰でも知っている大手企業も名を連ねており、比較的長い歴史を持っているそうだ。プログラム自体は、簡単に幾つかの質問に答えることと、指先に計器を接続して何かを測ることの二つだけ。後日、結果が渡される。

この研究によると、脳力のパターンは、大きく三×三の九つに、内四つはさらに二つに分かれるため、全部で十三パターンに類型できるといふ。測定後これらの類型が説明された小冊子を求め、結果が出るまで楽しみに読んでいた。自分で認知している自己像から、これではないか？こちらも当てはまりそうだが、などと、それなりにワクワクしながら数週間を経て、手許に結果が届いた。

測定結果は、自己認識からすると、やや驚きだった。ほぼ、これは無いだろうと思っていたのが、自分の脳力パターンだった。本質的には、「愛される元氣な人」に類されているのだが、「人に好かれる魅力がある」とは、さらさら思っていなかったため、全く予想外で驚いた。

しかし、よくよく読み込んでみると、確かにどれも当てはまる。左右両脳型で、同時に複数の対象に集中。情報収集、広報、教育・研修講師、企画立案・手配、サービス業務に向き、複数の仕事を持つべき独立自営型なのだそうだ。

一方、納得がいったのは、サブの類型の方だった。こちらには「世の中を動かす参謀」とタイトルが付けられていた。本業は、まさに参謀としての価値が問われる仕事だ。逆に、雑事に振り回される事・誰にでもできる仕事をする事に、強いストレスを感じてきたが、それは自分の脳の類型に拠るものだったとは、驚いた。

話は、変わる。

ここ最近、複数の仕事で、どれも共通の事態に直面していた。それは、「重要な決断を迫られている」とだった。

全く異なる別な仕事であるにも関わらず、深い部分では同じ問いであって、目的・目標にどれほど深くミコットするのか。どれだけ芯の強い意志を打ち立てるのか。そして、実際の行動をどうやってそれらにシंकロさせてゆくのか。これらの最後に問われるのは、とりもなおさず、人から指示されたことではなく、「自分で決めたことだ」と確信を持てるかどうか、に掛かっていた。

一方、一時期巷で流行った「動物占い」では、「い

い人チーム」に該当する。判断を迫られたとき、損得ではなく、「いい人と思われる方」を選択するタイプだと、生年月日から定義されるらしい。こちらも、うなづける記憶がある。

しかし、「仕事はいい人と、一緒にしてはならない」というのもまた、ビジネスの世界ではよく知られている。「この場合の「いい人」とは、本質的善人というより、ほんとうに「気のいいだけの人」というニュアンスが強い。つまり毒にも薬にもならない存在なのだろう。毒にならない分、助かるだろうが、薬にもならないから、何かを安心して任せられる信頼も預けにくいし、いざという時、厳しい判断にさらされるとおそろしくフリーズして何もできない人という側面が出てきてしまうのだろう。そうなったら、こちらの負担は大きい。

ホンキで、大きなプロジェクトに関するのなら、「いい人」だけで終わってしまう部分を切り捨てる覚悟を持って。そして、その覚悟の上に、「大事に参画することは、自分の意志であって、自分で決めた事なんだ」とハラを括れ。という天からのメッセージか。

そんな問いかけを自らに対して繰り返していた時、いつも利用しているネット書籍店のカートを見つめると、記憶に無い書籍が積まれている。酔っ払って積んだのだろうか。それとも…。と戸惑いながらカートを表示させると…。そこに在った書籍のタイトルは、なんと「運命はあなたが決めるのを待っている」。

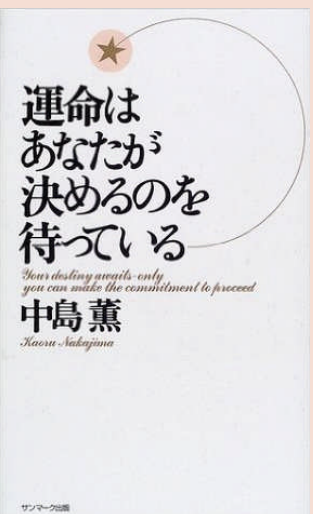
現在の心境にドンピシャの書籍名。あまりの事に、しばらくヘラヘラと苦笑いしか出てこなかった。

先の脳力診断の結果書に書かれていた事を思い出していた。我が脳の特質を活かすためのポイントとして本質面・サブの両方に掲げられていた共通の項目がある。それは、自分でやると決めたことを実行できる人である。「自分がやらねば誰がやると確信を持って臨む」と脳の特質を活かせる」と。

受取る結果は、その前に下した自分の判断・決定のレベルに依存する。大きな結果を得たければ、大きな決断・決定をし、確信とせよ。

もちろん、この本はすぐに取り寄せた。

今、自分のデスクの前に「すべての源は自分。すべては自分が源」と掲げている。



1990年代の映画「トータル・リコール」や「マトリックス」では、仮想現実（VR¹）の世界が鮮やかに描かれている。これらはサイエンス・フィクションではあるが、一定の理論とともに予言された未来のテクノロジーをベースにしている。21世紀であることに慣れてきた我々ではあるが、まだ、支配者や人工知能の手で夢を現実かの如く操られてはいないはずだ。しかしながら今年7月に、その極々初歩的なテクノロジーを用いて、仮想と現実の合成を売りにしたゲームが生み出され、瞬く間に世界を席卷しつつある。

スマホの画面には、今いる場所の周辺地図が自分のアバターとともに表示される。歩いたり走ったりすると、アバターも地図上を同じだけ移動する。そして近くにモンスターを察知すると、バイブレーションとともに、スマホのカメラで捉えられた現実世界に仮想世界のモンスターが写り込む。

技術面では何らブレークスルーを成し遂げておらず、GPS・デジタルマップ・写真合成という要素技術で構成された簡易な拡張現実（AR¹）に過ぎない。その上、同程度のARを用いたゲームはこれまでも存在していた。

だが、このゲームタイトルは、圧倒的なブランド力を持っていた。仮想世界から飛び出した有名なキャラクターが、スマホを介在することで生活圏に出没し、それをプレイヤーが現実には歩きながら探し、ゲットし、強化や進化させるのである。強いブランド力とARという目新しさが結びつき、老若男女を問わず幅広い層を惹きつけたのである。

その結果、あらゆるところでこのゲームをするために出歩く人が目立つようになった。私の生活圏で言えば、夜の丸岡城へ行くと、一人でこのゲームを楽しむ方々（私を含む）はむしろ少数派で、親子やカップルなどのグループが多く、また、女性や高齢者も意外と普通に見かける。一般の人々の行動に大きな影響を与えるような、そういう種類の刺激を備えたという点で、ゲームとしての大きなブレークスルーを成し遂げているのではなかろうか³。

一方でこのゲームは、現実社会に様々な不都合を生み出している。中毒性とそれに起因する歩きスマホやながらスマホによる問題。アプリ制作会社によって勝手に作られた特異点に係る問題。そして気になるのが、主にこのゲームをしない方々が抱くこれら一連のムーブメントに対する嫌悪感のようなもの。すべての諸問題について、圧倒的なリアリティで語り、そして対応していくことが求められるのではないかと感じている。

注1: Virtual Reality. 仮想の世界をあたかも現実のようにコンピュータによって作り出すこと、およびその技術を指す。

注2: Augmented Reality. 人間の目に実際に見える現実を、コンピュータにより拡張すること、およびその技術を指す。

注3: ソーシャルゲームとしての要素もポイント。ただしこのゲームに限った話ではない。

都知事選も終わり、これから小池知事には290万票以上もの支持を集めた責任を全うすべく様々な政策課題に対して粉骨砕身で公務にあたっていただきたいですし、私も一都民としてあるべき未来の東京に向けた行動をしていこうと思っています。

都知事選でも各候補者が最も強調してきた政策課題が「待機児童問題・不足する保育園問題」です。少子高齢による人口減少 労働力不足 減る消費力 減る税収というバッドサイクルを考えると、婚姻率・出生率とともに、母親の職務復帰率を高めねばならないというのは国家としても喫緊の課題でしょう。東京では特にこの待機児童問題が深刻化しています。

各自治体の取り組みを見てみますと

杉並区

2017年度に増加する待機児童対策として区立公園内に保育園を増設。一部住民が猛反対品川区

大井競馬場の駐車場に保育園を建設予定。

都内の大手保育園運営会社

都内勤務で入社時に10万円の一時金支給。

保育士の勤務地における賃金格差が明確に。

企業内保育施設の導入促進に補助金

最大数千万円近い補助も出るそうです。

など、自治体、民間ともに待機児童解消に向けて積極的な動きを見せています。私の5歳と1歳の子供たちは保育園に入園できましたが、入園するための妻頑張りや苦勞を見るにつけ、子を持つ親の誰もが利用できるサービスとなるため至急の対応を望むものであります。

しかし、子供の数は減少している(私の世代は200万人以上でしたが現在は100万人前半と半減)にも関わらず、これだけ保育園が足りない!!!という問題がクローズアップされるのはなぜなのでしょう？

1つ目は、女性の働き方や職場での位置づけの変化でしょう。昔は寿退職なんて言葉もありましたが今は死語です。また女性の管理職も増え、企業において女性の労働力は今や不可欠なものであります。それが晩婚化やDINKSというライフスタイルが出来た一因でもあります。

2つ目は、家族というユニットの小規模化、つまり都市部で核家族化がさらに進行しているということなのでしょう。祖父母世代もまた個人のライフスタイルを重視する年代であるため、子供・孫とべったりという生活ではなくなってきている気がします。

3つ目は、「地域で子供を育てる」が過去の遺物になった。この十数年地域コミュニティの崩壊が叫ばれますが、まさに都市部においては、地域で子供を育てることは既に皆無になりつつあります。

今後さらに、前述した3つの要素が進展するものであり、自治体、企業は安定した自治体運営、労働力の確保のためには、保育施設(もっと言えば小学生も対象にした学童保育も)の充実が必要不可欠なわけです。

2年後くらいには、東京駅近くの超高層オフィスビル内に保育園が開園する予定だそうです。子供も2、3歳から通勤ラッシュを味わなければならない時代になるんですね。保育園時代の思い出がギョウギョウの満員電車って。。。。。。

でも首都圏への人の一極集中が招く本問題は、地方の自治体にとってはチャンスです!!!安定した雇用基盤、生活基盤はもちろん、家族や地域とのゆとりある時間を求めている東京人多いと思いますよ。そういう私が正にそうです。

「ゆふいんの森号」に乗り込んだ我々は、本当に話し込んだ。まるで学校の同窓生のように。“同窓”の廣郡さんからのお便りに「旅行時とは一味異なった参集の方々の間に育まれた親近感に、誰彼となく会話が弾み、まるで修学旅行の思い出話でもしているような有様で、長い人生の中での一瞬のイベント、出会でかくも強い連帯感が生まれるものかと感動いたしました。」とあった。旅の時はそれほど会話を交わしていなかったけど、3泊4日の道程は共通の思い出を地下にマグマ如く蓄えさせていた。

ななつ星のおかげか、ゆふいんの森号にまで手を振ってくれる場面に出くわした。単純なことだけど、何かとても嬉しく、旅の気分を高揚させてくれる。スピードを落とすと、進行方向右手に見えるは「慈恩の滝」だ、雨量が多いため相当な迫力を持って流れ落ちている。見所の徐行運転だけじゃなく、車内の女性のクルーが写真撮影もしてくれる。

いよいよ、由布院に入ってきた。ところどころに屋根の上にブルーシートが見られる。のし瓦が落ちているのだ。家の倒壊こそないが、地震の爪痕がしっかり刻み込まれている。今回の旅はななつ星の同窓会だけじゃない、地震見舞い、ゆふいん文化記録映画祭への参加もある。由布院駅の塔の部分のガラスが割れたことが大きく報道されていたから、どうなっているかも気がかりだった。

森号が駅に着くと待合室兼ギャラリーのアートホールには由布院温泉観光協会事務局長の生野さんが待っていてくれた。そう、小生の次の次の局長だ。歓迎の挨拶、そして地震時の由布院駅での駅長の的確な判断が、ガラスが割れ落ちてきても負傷者が出さなかったことの話に続いた。今回の地震は昭和51年のときよりも大きなものだったけど、幸い負傷者は出なかった。もちろん、震災後2か月では町にいつもの賑わいはない。個人客は来るが、旅行社を通しての旅客は戻っていない。

まずは、今日の宿「玉の湯」に向かう。ここに行くと「Qさん、おかえりー」から始まるのが何よりも嬉しい。ちょうど、20年前まちなかを自転車で走り回っていた。ほんの前のように感じるが、その後は湯布院町から由布市への合併大騒動、ネット社会、インパウンド、そして今回の大地震、この地にいたらその大変化に対応できていただろうかとふと思うのである。

夜にはまだ時間がある。予め由布院散策ガイドを前旅館組合長の淵上さんに頼んでおいた。淵上さんは福岡からやってきて、旅館を建設に当たり旅館組合

と協議しなくてはならないようになっていたから、当時旅館組合の事務局長でもあった小生が「ゆふいんの流儀」に合わせて設計してねと、当時観光協会が作成途中の「ゆふいん建築・環境ガイドブック」を片手にイチャイチャ注文を出した。できた旅館は由布岳を目前に望む「彩岳館」、なかなかの人気の宿になっている。

淵上さんのガイドで皆は歩き出した。大分川に掛かる城橋では「なぜ、上流側と下流側の歩道の幅がちがうのでしょうか？」皆????。内科医の大坂さんが「橋のギャラリーでは?」「せ、正解!!由布岳を見るにも、眼下にある三角州で行わる祭りの時の源流太鼓の演奏、蝗攘祭りの時に松明をぶち込む大焚火の場になるから」もちろん、小生はわかってますぜ。「手すりのこの微妙なカーブは肘をついて由布岳を見るにその台に具合のいいように造ってあるのです。」クイズでガイドはなかなか面白い!

川土手を金鱗湖に向かって、更に進む。湖と言うより限りなく池なのに、それにキンリンコと名付けた云われや、由布院の神話と、話のネタは尽きない。

金鱗湖そばには由布院の宿の御三家のひとつ「亀の井別荘」がある。茅葺の門の先に宿がある。できれば、皆さんにお見せしたいと思い、チェックインの時間帯の少し前だからということもあり、フロントに皆を案内し、できれば宿の中を見せてもらえないだろうか頼んだ。「先のお客になる方々だから」と言ってね。主の中谷健太郎さんから長男の太郎さんに経営を引き継いだこともあって、フロントは大きく模様替えされていた。各離れの客室の外観は変わってはいない。各室が内風呂を構え、水廻りはこまめな手入れが必要になることもあってかちょくちょく手が入られている。玉の湯のおおらかなデザインに対し、亀の井別荘は隙のない数寄屋が基調になっている。庭の作りから個々の離れが皆さんとても気に入ったようだった。

極めつけは談話室。天井まである書棚を埋め尽くす本、大きなホーンの付いた蓄音機、暖炉、骨董の調度品の数々、中谷イズムの集積がここにはある。もし次の同窓会があるのなら宿は「亀の井別荘」にするつもりだ。天井桟敷でお茶をしていただき、玉の湯に戻ったのは16時半を回り、18時の会食までに湯にゆっくり浸かっていただくことにした。(つづく)

